『夫のいない3日間　～おとなりさんちの涼真くん～』

《登場人物》

▼高瀬涼真（たかせりょうま）
お隣さんちの息子。学生。あなたに片思いしており
一度だけチャンスがあってあなたと体の関係を持った。
それ以降、無表情で淡々と喋るタイプから、積極的にアピールするように。
前回のハメ撮り動画を使って、あなたを脅そうとしている。

▼主人公（あなた）
主婦歴2年。旦那との関係は良好……だが、帰宅が遅かったり
あなたの気持ちに寄り添えていなかったりと、小さな不満は持っている。
そんなとき、おとなりさん家の息子さんに言い寄られてしまい、一度だけ関係をもってしまった。それ以来、忘れようとしても身体が疼くようになってしまい……。

《商品紹介》

「おとなりさんちの涼真くん」の続編！

身体の関係を一度だけ持ってしまったふたり。
以降、涼真くんの猛烈アピールにあなたは拒否の姿勢を貫いているものの、
あの手この手であなたにもう一度触れようとする涼真くん。
どうにかして関係を切ろうとするが、そんな時……
『明日から3日間、出張に行くことになったんだ』
旦那の不在中、涼真くんからの誘惑を
あなたはすべて断ることができますか……？

◆トラック1

○ヒロインから避けられている涼真くん。
振り向いてもらいたくて何度も電話をかけている。
（前作・特典内容の続き）
○ヒロインのスマホに留守電が何件か残されており、
再生ボタンを押すと声が流れる。

涼真　「もしもし……俺です。　まだ怒ってますか……？
たしかに、あのプレゼントは少しやりすぎたかもしれないですけど……もうしないって約束するので。だから、電話に出てください」

○留守電2件目

涼真　「ごめんなさい、あなたがそんなに怒ると思わなくて……。
オモチャと、あの動画を送ったのは、嫌がらせとかじゃなくて
ただ、あなたに見てほしかったのと、あと……
興奮してくれたら嬉しいなって……思って……」（いい淀む）

○留守電3件目

涼真　「バカなことをして本当にごめんなさい……。
もう、俺のこと……嫌いになっちゃいましたか……？」

○留守電4件目

涼真　「お願いです……声が聞きたいんです……今後はしないって
約束するので、声をきかせてください……」

○留守電5件目

涼真　「どうしても出てくれないんですね……
だったら……あの手を使うしかなくなっちゃいますが……
いいんですよね？」

○5件目を聞き終わったタイミングで涼真くんから電話が

かかってくる。　躊躇しながらも、思い切って電話にでるヒロイン

彼女　『……もしもし』

涼真　「！　嬉しい……ようやく声が聴けた」

涼真　「あ、大丈夫ですよ、まだあの動画は誰にも見せてないですし、旦那さんにも送ってないから安心してくださ――」

彼女　『もうやめてっ』

涼真　「！　やめてって……なにがですか？　電話？何度もかけてしまったのは謝ります……でも、ちゃんと旦那さんが不在のときにかけるようにしていましたよ……？」

彼女　『電話のことだけじゃなくて……』

涼真　「……あぁ、動画のことですか？それとも、前に送ったオモチャのこと？……どれも本当に、嫌がらせのつもりはなかったんです。恥ずかしがりつつも、興味を持ってくれたら嬉しいなぁって……」

彼女　『どれも全部、困るの。やめて』

涼真　「！　……なんでそんな酷いこと言うんですか……俺があなたのことを好きなのは知っていますよね？」

彼女　『……やめて』

涼真　「どうしてもダメ？……じゃあもし、あの動画を旦那さんに送り付けるって言ったら……どうしますか？」

彼女　『……っ』

涼真　「ふふ」

○ヒロインが動揺しているのを感じ取って余裕ぶっているが

彼女　『……いいよ、もう』

涼真　「え……？」

○意外なヒロインの返事に驚く涼真

涼真　「今、なんて言いました？」

彼女　『もう、いい。送ってもいいよ』

涼真　「え、正気ですか？　あれを旦那さんに見られたら――」

彼女　『全部話す。許してもらえないかもしれないけど……
それでも、こんな状態が続いて、またあの人を裏切ってしまう
よりはずっといいから……』

涼真　「なっ……全部話すって」

涼真　「許してもらえないかもしれないって自分でもわかってるのに
それでもいいんですか？　本当に？！」

彼女　『うん』

涼真　「……離婚になるかもしれないのに？」

彼女　『うん、そうなったら仕方ない。悪いのは私だから』

○ヒロインの決意に、ショックを受ける涼真

涼真　「！　……わかり、ました。そこまで言うなら、
もう、やめます……」

彼女　『え？』

涼真　「あなたのことは、諦めます……」

○今までの勢いは消え失せ、寂し気な声に

涼真　「離婚を覚悟で旦那さんに全てを話すんでしょう？
それほど、俺のことが嫌なんですよね」

彼女　『あ……』（そうじゃないと言いかけるが言えず）

涼真　「まぁ、俺より旦那さんを選ぶのは当然ですよね……。
あなたの気持ちはわかりました。
……今まで迷惑をかけてすみませんでした」

彼女　『涼真くん……？』

涼真　「安心してください、あの動画を誰かに送ったりしないので。
あなたにも……もう連絡しないようにしますね……それじゃ」

○切りかけるが、呼び止めるような声が聞こえて

彼女　『えっ、ま』

涼真　「なんですか？」

彼女　『あ……えっと……その』

涼真　「……何もないなら、もう切りますが」

彼女　『あ、そ、そうだね……ごめん……』

涼真　「……あぁそうだ。明日からは近所で会ってもなるべく話しかけないようにしますね。あなたも、俺を見かけてもできるだけ無視してください。
寂しいですけど……中途半端に気を持たせるようなことをされても、
辛いだけなので」

彼女　『わ、わかった……』

涼真　「それじゃ……旦那さんとお幸せに」

○プツンと電話が切れる

彼女　『……（これで、よかったんだよね）』

＜　場面転換　＞

○夏・住宅街。昼過ぎ……ヒロインが買い物をして帰宅する。
自宅前に到着し、鍵をあけようとしていると
ふと、隣の家の前に涼真がいることに気づく。
（扉の前でしゃがみこんでいる）

涼真　「あ……」

○涼真もヒロインに気づいて声をあげるが、
しまった、という顔をしてまた目をそらす。

彼女　『……こ、こんにちは』

涼真　「！　……こんにちは」

○話しかけられ驚くも、そっけなく挨拶を返す

彼女　『……』

涼真　「……」

彼女　『今日すごく暑いね』

涼真　「……そう、ですね。今日は最高気温が三十度を超えるようなので

これからまだ暑くなりそうですが」

彼女　『そ、っか……』

○なかなか自宅に入ろうとしないヒロインに

涼真　「まだ何か？」

彼女　『あ、えっと……』

涼真　「……家に入らないんですか？」

彼女　『入る、けど。涼真くんは、そこで何してるの？』

涼真　「俺は鍵が……あ、いえ。なんでもありません」

彼女　『え、なに？　鍵がどうかしたの？』

涼真　「なんでもないですって。俺のことはいいから、早く中に
入ったらどうですか。せっかく買ってきたものが悪くなって
しまいますよ。冷凍食品も溶けちゃうんじゃないですか？」

彼女　『でも……』

涼真　「俺のことは放っておいてください」

彼女　『っ……』

○そっけない態度に少しショックを受けながらも
ヒロインは自宅に入る。買い物袋を玄関に置くが……

彼女　『……』

○やっぱり心配になって玄関前に戻ってしまう
○玄関をあける音

涼真　「わっ……びっくりした……
なんですか？」

○涼真の（家の）前まで行き、

彼女　『もしかして、鍵がなくて家に入れないの？』

涼真　「（小さくため息）……そうですよ。鍵を忘れてしまった上に
今は家に誰もいなくて入れないので……こうして親の帰りを
待っているんです。それがどうかしましたか？」

彼女　『熱中症になっちゃうよ』

涼真　「俺が熱中症になって倒れようが、あなたには関係ないことですよ」

彼女　『そんな……関係ないなんて言わないでよ』

涼真　「だって本当のことでしょう。俺はあなたに優しくしてもらう資格、
ありませんから……」

○三角すわりでぎゅっと顔を俯かせてしまう涼真。

彼女　『でも、ここにずっといたら本当に危ないから』

○涼真の腕をつかんで立ち上がらせようとするが

涼真　「なんですか？　わ、ちょっと……」

○涼真が思ったよりも暑さにやられていて、立ち上がれず…
息も少し苦しそうで……

涼真　「いいから……放っておいてください……」

彼女　『ちょっとまって、すごく熱い……何時からここにいるの？』

涼真　「ここに、ですか？　えっと……お昼前からだから十一時ごろからかな…
　そういえば、お昼も食べてない……だからさっきから眩暈がするのか」

○冷静だけどふらふらな涼真を見て焦ったヒロイン

彼女　『！　ね、うちに来て』

涼真　「は？　何言ってるんですか。あなたの家になんて……」

彼女　『このままじゃ本当に危ないから！』

涼真　「やめてください……俺はもう、あなたに迷惑かけたくないんです」

彼女　『でも、何かあったら心配だよ……』

涼真　「！　……はは、優しいんですね……それじゃ……
　少しだけ、水をもらってもいいですか……？」

終わり

続きは『旦那のいない三日間～おとなりさんちの涼真くん』にて。
「おとなりさんちの涼真くん」続編は２０２２年１１月発売予定◎